

昭和63年度演習林年報

<https://doi.org/10.15017/18579>

出版情報：年報（九州大学農学部演習林年報）．1988，1989-12-12．九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：



大河内地すべりと宮崎演習林の将来

1989年7月下旬の11号台風の通過とその後の12・13号台風の影響で、宮崎演習林では7月15日の降り始めから8月4日まで連続雨量943mmという、過去45年の観測史上11位の雨を記録しました。この雨によって、一ツ瀬川を挟んで演習林庁舎のある本郷集落の対岸にある高塚山の尾根附近に地すべりが発生しました。この附近一帯の斜面は大規模な地すべり地形であり、以前から少しずつ動いていたことは識者の間では知られていたところですが、数年前この斜面の中腹に造られた林道に5月下旬頃から亀裂が生じ、今回の集中豪雨によってこの亀裂がさらに大きく拡大しました。

8月1日夜、大河内に災害対策本部が設置され、本郷集落の住民42世帯140人に対して避難命令が出されました。住民は周辺の集会所に分れて避難し、その後、昼間は自宅に帰り、夜は矢立キャンプ場に村が設営した仮設住宅に避難するという生活が10月25日まで続きました。演習林職員も職員宿舎の5世帯19人は、人吉連絡所で10日間の避難生活を送った後、4世帯は熊本県球磨郡に新たに住居を求め、1世帯は前記の仮設住宅で暮しました。

今回の夜間立入禁止は演習林の管理運営にはそれほどの支障は来しませんでした。演習林本来の目的である教育・研究の面ではかなりの問題が生じ、9月以降の3実習は中止、また宿泊をとまなう研究者の受入は不可能になりました。来年度以降についても降雨期の夜間立入禁止が予想されます。

地すべりの動きは徐々におさまりつつありますが、大雨の度に動きが活発になることが予測され、宮崎県では緊急治山事業として、この地すべりによって崩壊の恐れのある土砂の排除工事を8月末から開始しました。しかし安全な状態にするための排土量は実に30万立方メートルといわれており、この工事には長期を要する模様です。しかし当該地域の排土が完全に行われたとしても、それは地すべり地域の一部であり、本郷地区全域の将来にわたっての安全を保障するものではないと考えられます。

このような状況の下で、現在の庁舎が地形的に抱える様々な災害の危険性と、宮崎演習林の将来を考えた場合、庁舎および職員宿舎の移転を検討する必要があると判断されます。現在移転の候補地として矢立樹木園があがってきております。矢立附近は緩傾斜の台地で、地形的にも安定した災害の危険性のすくない土地であるという判断によるものです。標高880mの矢立樹木園は、現庁舎(標高600m)よりもさらに高冷地で、冬の寒さは厳しくなりますが、人吉市に近くなるため、物品調達などの面では便利になると思われます。矢立樹木園は矢立の集落からはやや離れており、商店や郵便局などがすぐ近くにある現庁舎と較べると日常の生活面では不便になりますが、本郷集落が将来どうなるのかは現時点では予測できません。場合によっては高原状の台地に位置する矢立附近が大河内の中心的集落になっていく可能性もあります。

施設の移転は様々な問題に関連し、簡単に結論は出ないかも知れませんが、さらに多くの英知を集めて宮崎演習林の将来を考えていきたいと思います。

1989年10月

研究部長 汰 木 達 郎